

「社会性の起原—ホミニゼーションをめぐる」

2019年度第3回共同研究課題研究会報告

1. 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

2. 研究会基本情報

日時： 2020年2月1日（土） 13:00～18:30

場所： AA研マルチメディアセミナー室（3階306室）

報告者：

1) 川添達朗（AA研研究機関研究員）

ニホンザルのオスにみられる連合・寛容性・互惠性

2) 河合文（AA研研究機関研究員）

2つの紐帯と東南アジア狩猟採集民の「社会性」：マレーシア半島部に暮らすバテッの「共住」と「親族関係」

3. 内容（要旨および質疑応答・議論）

3-1) ニホンザルのオスにみられる連合・寛容性・互惠性（川添達朗）

要旨：

群居性哺乳類の多くの種で、オスが出自群（群れ）から移出、分散することが知られている。この現象は、近親交配の回避や繁殖機会の獲得、新しい生息地やニッチの獲得による適応度の上昇が究極的要因として挙げられている。一方で、移出過程において死亡率の上昇や社会交渉の機会の喪失といったリスクに対処する必要があり、どの群れのメンバーでもない群れ外オスだけからなるオスグループの形成はリスクへの対抗戦術の一つであると考えられる。しかし、霊長類においては、オスグループを含め、群れ外オスたちがだれとどのような社会交渉を行っているのか、その様相は明らかになっていない点が多い。

マカク属に分類される霊長類は優劣関係の厳格さをもとに専制主義的（despotic）な種と平等主義的（egalitarian）な種に分類され、それらは系統的制約を受けるという議論があり、オスの敵対的關係に焦点があてた研究が多く行われてきた。一方で、オス間にも親和的關係は広く認められ、平等主義的（egalitarian）な社会を持つとされる一部のマカク種では、連合形成や寛容性との関連が見られることが報告されるようになってきた。日本固有種であるニホンザルは、厳格な優劣関係をもつ専制主義的（despotic）な社会をもつ種の一つであり、優劣関係が緩やかな egalitarian 種とは異なる社会的特徴を持つ。本発表では、despotic

種であるニホンザルを対象に、親和的關係と、優劣關係を手掛かりに、群れ外オスを含めたオス間の社會を論じることを目的とする。

宮城県金華山島に生息する野生ニホンザル個体群は、1981年以降継続して個体群動態が把握され、2019年3月時点で、約250頭が確認されている。また、オトナ（推定7歳以上）のオスのうち相当数が群れ外オスとして生活しており、オスグループも頻繁に観察されるのもこの個体群の特徴である。

オスは群れ間を移籍するため、誰が群れオスで誰が群れ外オスなのか、その定義は実は難しい。従来は定性的な定義が用いられてきたが、本発表では観察対象としたオスと他個体との近接とグルーミングを定量的に評価することで、群れオスと群れ外オスを定義し分析を行った。群れオス同士に比べ群れ外オスは観察時間のうち他のオスと近接している時間割合が短だけでなく、観察されることもない不在の期間が多くあった。これらの結果は、群れ外オスの凝集性の低さを示すものであり、オスグループが群れほどには凝集性が高くない、“離合集散的”な緩いまとまりをもつ集団であることを示唆している。一方で、近接時間当たりで比較すると、群れ外オス同士は頻繁にグルーミングを交わしており、交渉機会の少なさを時間あたりの交渉頻度を増加させることで補償する行動戦略をとっていると考えられる。

個体間の強く持続的な親和的關係は social bond と定義される。Egalitarian 種の研究からはオス間にも social bond が認められることが報告されているが、despotic 種ではそのような検討はなされていない。本発表では、despotic 種であるニホンザルにも social bond がみられるか否かの検討を行い、それがオス間の連合形成や寛容性に影響するかどうかについて分析した。ニホンザルは繁殖に明確な季節性を示すが、非交尾期に比べ交尾期には親和的行動の顕著な現象が見られた。しかしながら、交渉相手の選好性は両期間で一致し、親和的関係の持続性が認められることから、despotic 種であるニホンザルにおいてもオス間に social bond が存在することが強く示唆され、ある社会における優劣關係の強さにかかわらず、social bond が形成されることが考えられる。一方で、egalitarian 種で多く報告されているような、bond と連合形成との関連はニホンザルでは見られず、これまで報告が少ない、bond と寛容性の関連が示唆される結果を得た。グルーミングに代表される親和的交渉と連合形成や寛容性との関連は、互酬的な行動として霊長類行動学において長く議論されてきている課題である。本発表では、互酬性の基盤となる social bond は優劣關係の在り方にかかわらずマカク属に普遍的な行動である一方、そのような bond が、どのような行動と互酬的になるかということには優劣關係が大きく寄与している可能性を示した。

本発表では、群れ外オスを含めたオス間の親和的行動、敵対的行動、連合をもとに、オスの柔軟な行動戦略を示すとともに、優劣關係が互酬性の発現の仕方に影響しており、それは系統的制約を受けている可能性を提唱した。より詳細な議論のために、さまざまな種との比較研究が今後必要になってくるだろう。

また、今後の研究として、ニホンザル、チンパンジー、ヒトのコドモ期・ワカモノ期にお

ける社会関係の比較を提唱する。ヒトの延長されたワカモノ期（adolescent period）は、オトナとしての様々な規範を学習・試行する期間であるとされるが、霊長類だけでなく鯨偶蹄目や長鼻目の哺乳類でも同様の議論が交わされている。人間の社会性を考えるうえで、ヒトだけでなく、ほかの霊長類種や哺乳類種との学際的な議論も有効な手段であるように思われる。

質疑応答と主な議論：

- 群れ外／群れ内と分析することと同心円状の周縁として分析すること
 - ・ 群れ内のオスとの間に優劣関係がみられないなら「単独オス」ではなく「周辺オス」とみた方が良いのではないか
 - ・ 複数の群れに順位をもつオスがいますか
 - ・ 屋久島の場合は非交尾期にもオスが群れ内にいるため、「群れ」としてのまとまりがあるが、金華山の場合は群れとしてのまとまりが明確ではない
 - ・ 「群れ外オス」という言葉は少し強烈で聞き手が先入観にひっぱられてしまう可能性があるから、金華山らしさとしてデータを提示して、これは群れ外オスと考えられるという風にまとめたら良いのでは

- 群れの境界がうかびあがる瞬間
 - ・ 交尾期の連合から個体同士のまとまりと境界が浮かび上がり「群れ」がみえてくる
 - ・ 「仲良くすること」と「連合すること」は異なる次元のことだと考えられる
 - ・ そうした関係がみられる個体を「周辺」の個体として分析するか「群れ外」の個体として分析するか

- 分析の枠組みと「連合」と「寛容」について
 - ・ 「連合」や「寛容」という語を聞くと、誰が誰を許しているのかといった行動の主体性について考えてしまうが、そこは問わずにネットワーク式に分析した方が良いのか、それとも主体性を明確化した方が良いのか、どちらが良いか分からないが、どちらの枠組みで分析するかをはっきりさせた方が面白いと思う

- 専門用語を説明する必要性
 - ・ 人類学者も参加する研究会であるため、“despotic”、“egalitarian”、“tolerance”などの用語は、霊長類学における用法を（どういう語と対で使われているかも含め）説明する必要がある、人類学における用法との違いも示せたら良い

- 「連合」や「寛容」という語について
 - ・ 「寛容」という語をどのような意味で使用しているか

- ・ 普通なら攻撃するところを攻撃しないから「寛容」なのか、それとも単に攻撃頻度が少ないから「寛容」、あるいは食料や異性といった資源獲得の格差が少ないから「寛容」（つまり「平等」）という意味なのか

● “adolescent”に着目することについて

- ・ ボジン（Bogin 2009）は、adolescent はヒトにしかないといっているが、サルについて young male ではなく adolescent をどのように定義するか、動物の性的成熟はヒトと比べて急激におこることを考慮しないといけない
- ・ adolescent という語は social skill の獲得という文脈で使われるが、それをサルについてどのように調べるのか
- ・ 若いメスにも、特有の社会性みたいなものはあるのか
- ・ social skill の獲得として毛繕いの相手（血縁、非血縁）の変化に着目することができるかも
- ・ 屋久島では群れ間の関係をみると、大人はより敵対的であるのに対し、若い個体は親和的だった

3-2) 2つの紐帯と東南アジア狩猟採集民の「社会性」：マレーシア半島部に暮らすバテットの「共住」と「親族関係」（河合文）

要旨：

1. はじめに

バーナード（Bernad 2013）は、霊長類とヒトの社会構造の比較を通してヒトの社会構造の特徴を挙げ、その進化について検討している。彼は、複数の男女のペアから成る集団を形成する点がヒトの大きな特徴であると述べたうえで、ヒトはペアとなる相手を決める際に当人の意思だけでなく親族の意向も大きな影響力をもつ点においても、ヒトと霊長類は異なるという。そして「複数の男女のペアから成る集団」という枠組みをもとに、集団間の争いや集団内の協力的行動といった点から考察を進めている。

ヒトの社会性というものを探求するうえで「集団」や「親族」は重要な概念であると考えられるが、この2つの語が全ての社会に等しく適用可能な枠組みであるかは、疑問である。人類学においては、資源のある場所に移動して暮らすフォレンジングを営む人びとは、得られる資源量に応じて人数やメンバー構成が流動的なバンドという社会形態をとることが明らかにされてきた。バンドという「集団」の場合、メンバーは基本的に「親族関係」にあるとされるが、具体的な「親族関係」の実態は明らかではなく、「集団」というまとまりの境界も明確ではない。

そこで本発表では、マレーシア半島部の狩猟採集民バテットを対象に、「集団」と「親族」について考察した。バテットの人口は2010年時点で約1,300人であり、複数の「川筋集団」

に分かれて暮らす。発表では自らを「コ合流域のバテッ」と自認する人びと（約200人）を対象とした。なお「集団」については、同じキャンプで生活する、すなわち物理的に相手が見える範囲で「ともに暮らす」という意味の「共住」と、直接お互いを目視できずとも同じ川筋集団として「ともに暮らす」という意味の「共住」、という2つの「共住」の観点から検討した。

2. 移動生活における「共住」と「親族」

バテッは政府が設置した村での生活と、森でのキャンプ生活を組み合わせて暮らしている。人びとは雨期になると村の近くに集まるが、その際も5~10家族ほどに分かれて異なる水場を利用する。また乾期には、男性3人~8人ほどで森林産物の採集キャンプに出かけたり（その間女性と子供は村の近くに留まる）、3~10家族程に分かれて果樹や魚の豊富な場所へ移動してキャンプ生活を送ったりする。

同じ村を利用する人は、全員が血縁関係や婚姻関係で結ばれた「親族関係」にあるといえるが、そこには当人が互いの関係をすぐに語れない程に離れた関係も含まれる。いっぽうキャンプメンバーは、基本的に本人同士が自分と相手の「親族関係」を辿れる人びとと、メンバーの「友達」で形成される。バテッ語に「親族」というカテゴリーはないが、祖父・祖母、父・母、兄/姉、妹/弟、オジ・オバ、そして義理の父母、義理の兄姉、弟妹といった親族名称がある。そして「親族関係」を辿ることができない相手に対しても、こうした呼称が拡張して使われ、それに基づいて関係が構築される。

3. 呼称法と親族的紐帯の形成

親族としての紐帯の形成について、バテッが生涯を通じてどのような人間関係に位置づけられるかという観点から検討した。バテッの場合、生まれた子どもの生存がほぼ確実であると認識された後にはじめて命名され、その時からコミュニティの一員とみなされるようになる。子供の間はこの生まれ名で呼び捨てにされる。しかし、男女別々に遊ぶ思春期頃になると、生まれ名で呼び捨てにされるのを快く思わなくなり、「誰々の父/母」というテクノニミー式のニックネームを使うようになる。またこの年頃になると、オジやオバ、さらに友達を頼って両親とは異なる生活する機会が増え、特に男性は他の川筋に出かけて過ごす機会が増える。

そして、当人同士が一緒にいることに同意し寝床をともにすることが続くと、その男女は「結婚した状態」となる。結婚式を行う慣習がない彼らは、女性が男性を「私の夫」、男性が女性を「私の妻」と呼び、他の人びとも妻に向かって夫を「あなたの夫」と呼ぶことで、2人の関係が社会的に承認されたことが分かる。そして子供が生まれると、夫と妻は子供の名前を使って「誰々の父/母」と呼ばれるようになる。またさらに孫ができると、今度は「誰々のおじいさん／おばあさん」と呼ばれる、というように子供を中心に呼称が変化していく。

4. 河川を含む呼称と「共住の集団」

出産はその時のキャンプ地で行われるが、コ合流域の人びとは、誰がどの川のキャンプで

生まれたかという「生まれ川」についての知識を共有している。「生まれ川」の名前をそのまま子どもの名前として使うことも多い。そうした人が大人になって子どもをもち、テクノニミー名で呼ばれるようになると、河川名を呼び捨てにするのは立派な大人を呼び捨てにするのと同じであり失礼であるという理由から、河川も「誰々お父さんの川」と呼ばれるようになる。

このような命名法とテクノニミーの組み合わせをつうじて環境が社会化され、社会化された環境が人びとに共有されると同時に、集団としての過去も共有される。それによって、同じ川に共住するバテツとしてのアイデンティティが形成・保持されると考えられる。そのため彼らのあいだには、物理的に近くにいるキャンプメンバーとしての「共住」がみられるだけでなく、ともに生きる意識をもつ人びととしての「共住」が成立し、「コ合流域のバテツ」という川筋の「集団」が形成されるわけである。

5. おわりに

人数やメンバー構成が流動的なバンドを形成するバテツの場合、同じキャンプで生活する人に加えて「親族関係」を通じてつながる人の「生まれ川」にかんする知識を共有することで、「同じ川で生活する人びと」としての川筋集団が形成されていると考えられた。また彼らの「親族関係」の構築においては、血縁や婚姻という結びつきだけでなく、実際に人びとが互いをどう認識しどのような関係を実践するか、という点が重視されている。

そうした紐帯の形成においては、呼称法が重要な役割を果たす。相手をどのような人として認識し、いかなる関係を構築するかということにかんして、呼称法が一定の枠組みを提供するためである。「集団間の争い」や「集団内の協力行動」について考える際も、呼称に着目することでその人の社会関係がみえてくる可能性があるだろう。しかしバテツの場合、婚姻によって異なる川筋へ移動する人もおり、そうした場合、どのように「集団」が認識されるかについては今後の課題とされる。

質疑応答と主な議論：

<バテツのエスノグラフィ・遊動・狩猟採集生活>

●エスノグラフィ

- ・ 19世紀以降のエスノグラフィが残されている
- ・ 古いエスノグラフィでは、森の中で孤立した典型的な狩猟採集民として描かれている
- ・ 食料が乏しい熱帯雨林の特性上、孤立した生活というのは難しく、他集団との交流が行われていた

●遊動、ジョック

- ・ 家族キャンプはだいたい同じ場所に行き、ほかの家族を排他的に扱うことはない
- ・ 他の家族のキャンプ地についての情報は人びとに共有され、同じところに人が集中しないよう避けあう場合もある

- ・ 移動は基本的に夫婦とその子どもを単位とする
- ・ できるだけ孤立することは避け、年寄りや弱者がいると、遠くまではいかない
- ・ 弱者への支援・ケアはある

●狩猟採集生活の維持

- ・ バテツが今でも狩猟採集生活が続けるのはなぜか
狩猟と森林産物の取引をセットで行っている
定住するためには社会関係の調整が必要だが、バテツはそこに重点を置かない
- ・ 現金経済に組み込まれているのに、なぜ定住しないのか
食料を果実（ドリアン）に依存しているときはあまり動かなくていいが、雨季には利用できず、定住できない
- ・ 合理的かつ効率的な生活である
- ・ 儀式を持つとしないのに、kinship は大事にしていることから、kinship と食物が本質的に大事であるということが示唆されているのではないか

<狩猟採集民と即時・遅延リターンシステム>

- ・ バテツは即時リターンシステムを志向しつつ、他集団との関係の中で生活スタイルを形成してきた
- ・ 現金経済があり、コメを主食としているが、分配や蓄財はあるのか
- ・ 即時リターンシステム（≡狩猟採集民）/遅延リターンシステム（≠狩猟採集民）という考え方は、狩猟採集民であるか否かとは関係ないのでは
- ・ 食物の貯蔵ができれば遅延リターンシステムであると言え、狩猟採集民であるか否かとその特徴の因果関係が逆ではないか
- ・ 即時リターンか遅延リターン化の分類は、食糧を貯蔵できる/できない、ではなく、貯蔵する/しない、の問題なのでは
- ・ 典型的な狩猟採集民であるということと、即時リターンの志向的であるという話を強く結び付けすぎである
- ・ 歴史的な背景にこだわらなくてもいいのではないか
- ・ 実際に起きている現象をどう理解したらいいのかを考えるべき

<川筋グループ・共同体を通じたアイデンティティ>

●川筋グループが共有しているもの

- ・ 一帯の環境についての認識（知識）
- ・ 川筋の利用について権利の概念はない

●“今”を共有することによるアイデンティティの形成

- ・ 今の生活基盤と一緒にいる人たちが大事なのか
- ・ 共同体としてともに活動している人たちを重視する
- ・ バテッの時間認識は“今”に集中していて、死ぬとすぐに呼び名が変わる
- ・ “今”を重視することは、バテッの即物的な感覚と合致しているのではないか
- ・ 親族と環境が複合していて、川を通した疑似親族関係ができていると考えられるのか

<婚姻>

- ・ 一夫一妻だが、明示的な結婚式はない
- ・ ハヤを共有する＝ペア＝夫婦
- ・ ヒトのペアと霊長類のペアの違いがみられる
ヒト（バテッ）のペア：日中は別行動をしても一緒に寝ることが重要
- ・ 夫婦として社会的な承認を得る必要がある
- ・ 子どもを作ることが夫婦としての正当性を担保し、夫婦関係が維持されるのではないか